立命館大学大学院
2018年度実施　入学試験
一貫制博士課程

先端総合学術研究科
先端総合学術専攻

入試方式	実施月	専門科目		小論文	
		ページ	備考	ページ	備考
一般入学試験	9月	P.1～		P.5～	
	2月	P.3～		P.8～	英語　窓口公開のみ （WEB非公開）
一般入学試験（自己推薦）	9月				
	2月				
社会人入学試験	9月				
	2月				
外国人留学生入学試験	7月 （2018年9月入学）				
	9月				
	2月				
学内進学入学試験	7月				
	9月				
	2月				
APU特別受入入学試験	7月 （2018年9月入学）				
	9月				
	2月				
飛び級入学試験	2月	×		×	
転入学試験	7月 （2018年9月入学）				
	9月				
	2月				

問題冊子は回収します

2019年度
先端総合学術研究科（一貫制博士課程）

一般入学試験問題（2018年9月9日実施）

専門科目

入試方式	試験時間	解答方法
一般入学試験	9：40～11：10　（90分）	問題を解答

（途中退室はできません）

【解答にあたっての注意】

1. 使用する言語のすべての解答用紙に受験番号・氏名を記入すること。
（使用しない言語の解答用紙には受験番号・氏名は記載する必要はない）

2. 試験中に気分が悪くなった場合は、静かに手を挙げて監督者に知らせること。

問１　以下の中から用語を３つ選択し、それぞれの意味する内容を 400 字以内で説明せよ。
Ｑ１．Select three terms from the following and explain the meaning within 200 words respectively.

〇言語行為（speech act）
〇詭弁（sophistry）
〇エージェンシー（agency）
〇生活史（life history/oral history）
〇主体化（subjectivation）
〇無意識と抑圧（unconscious and repression）
〇優生手術（eugenic surgical sterilization）
〇コモンズ（commons）
〇進化心理学（evolutionary psychology）
〇ポストモダン（postmodern）
〇障害の社会モデル（social model of disability）
〇少子化（declining birthrate）

問２　以下から質問を１つ選択し、1000 字以上 1500 字以内で論述せよ。
Ｑ２．Select one from following questions and answer it within 1200 words.

（１）「自己決定権」について自由に論述せよ。
Discuss the right of self-determination.

（２）治療と治癒の関係について考えるところを論述せよ。
Argue what you think about the relation of treatment (care, therapy) and recovery.

（３）「負い目」を感じることの肯定的側面と否定的側面について論述せよ。
Argue positive aspect and negative aspect of feeling “indebtedness”.

（４）文化的表象と倫理の関係について、例を挙げて論述せよ。
Discuss the relation between cultural representations and ethics with examples.

問題冊子は回収します

2019 年度
先端総合学術研究科（一貫制博士課程）

一般入学試験問題（2019 年 2 月 3 日実施）

専門科目

入試方式	試験時間	解答方法
一般入学試験	9：40～11：10　（90 分）	問題を解答

（途中退室はできません）

【解答にあたっての注意】

1. 使用する言語のすべての解答用紙に受験番号・氏名を記入すること。
（使用しない言語の解答用紙には受験番号・氏名は記載する必要はない）

2. 試験中に気分が悪くなった場合は、静かに手を挙げて監督者に知らせること。

問１　以下の中から用語を３つ選択し、それぞれの意味する内容を 400 字以内で説明せよ。

Ｑ１．Select three from the following terms and explain the meaning within 200 words respectively.

○オートエスノグラフィー（auto-ethnography）

○多自然主義（multi-naturalism）

○セカイ系（sekai-kei）

○超越論的（transcendental）

○無限責任と有限責任
(infinite responsibility and finite responsibility)

○インペアメント（impairment）

○ディープラーニング（deep learning）

○参与観察（participant observation）

○抽象表現主義（abstract Expressionism）

○絶滅（extinction）

○語り（narrative）

○構築主義（constructionism／constructivism）

問２　以下から質問を１つ選択し、1000 字以上 1500 字以内で論述せよ。

Ｑ２．Select one from following questions and answer it within 1200 words.

（１）　地域社会あるいはコミュニティが抱える問題について自由に論述せよ。
Discuss the problems that community/local society has.

（２）医療化の光と影について論述せよ。
Discuss light and shadow of medicalization.

（３）「自己責任」をめぐる問題について自由に論述せよ。
Argue the issue of “self-responsibility”.

（４）文化的表象と子どもの関係について、具体例を挙げ、何らかの理論に基づいて論述せよ。
Discuss what is relationship between cultural representations and children with examples, in a specific theoretical framework.

問題冊子は回収します

2019 年度
先端総合学術研究科（一貫制博士課程）

一般入学試験問題（2018 年 9 月 9 日実施）

小論文

入試方式	試験時間	解答方法
一般入学試験	11：40～12：40　（60 分）	問題を解答

（途中退室はできません）

【解答にあたっての注意】

1. 使用する言語の解答用紙に受験番号・氏名を記入すること。
   （使用しない言語の解答用紙には受験番号・氏名は記載する必要はない）

2. 試験中に気分が悪くなった場合は、静かに手を挙げて監督者に知らせること。

日本語の論述試験と英語の論述試験の<いずれか１つ>を選択し、文章を読んで設問に答えよ。
（日本語の問題を選んだ場合には、英語の問題には回答しないこと）。
Select either the Japanese or English exmanination, read the sentences and answer the questions.（If you choose the English examination, you don't need to answer the Japanese one.）

小論文（日本語）

共同体とは普通、何かを、たとえば言語やものの見方や考え方を、共有している人びとが形づくっているものだと考えられている。また、一つの民族、都市、制度といったものを共に作っている集団によって形づくられると思われている。けれども私は、すべてを残して去っていく者、すなわち、死にゆく人びとのことを考え始めた。死は一人ひとりの人間に一つひとつ別のかたちで訪れる、人は孤独のなかで死んでいく、とハイデガーは言った。しかし、私は病院で、生きている人が死にゆく人の傍に付き添うことの必然性について、何時間も考えさせられた。この必然性は、医師や看護師、つまり、できることをすべて行なうためにそこに居る人びとだけのものではない。死にゆく人に最後まで付き添おうとする人、打つ手が何もなくなったのに居つづける人、自分がそこに居つづけないわけにはいかないと切実に感じている人にとっての必然性でもある。それは、この世で最も辛いことではあるが、人はそうすべきだとわかっている。死にゆく人が人生を一緒に生きてきた親や恋人だから、という理由だけではない。人は、隣のベッドで、あるいは隣の病室で、まったく知らない人が孤独に死につつあるときにも、そこに居つづけようとするのだ。

これはたんに、一人ひとりの人間のモラルを問う決定的瞬間という意味しかないのだろうか？　私は、病院であれ貧民街であれ、孤独に死にゆく人を見捨てるような社会は、みずからその土台を根こそぎにしているのだと考えるようになった。

私たちと何も共有するもののない――人種的つながりも、言語も、宗教も、経済的な利害関係もない――人びとの死が、私たちと関係している。この確信が、今日、多くの人びとのなかに、ますます明らかなかたちで広がりつつあるのではないだろうか？ 私たちはおぼろげながら感じているのだ。私たちの世代は、つきつめれば、カンボジアやソマリアの人びと、そして私たち自身の都市の路上で生活する、社会から追放された人びとを見捨てることによって、今まさに審判を受けているのだ、と。

こうした考察から私が理解したのは、他者のなかにあって私たちに関係するものとは、まさに彼または彼女の他者性――私たちと対面するときに、私たちに訴えかけ、私たちに異議を申し立ててくるもの――にほかならない、ということである。

<中略>

合理的共同体が登場する以前は、他者との、侵入者との出会いがあった。出会いは、人が他者の要求と異議にたいしてみずからを曝すときに始まる。合理的共同体――個々の明晰な精神はその共通の言説の代表者でしかなく、各人の努力と熱情はその共同の事業のなかに吸収されて脱個人化されてしまう共同体――の下に、もう一つ別の共同体が存在している。それは、自分が属する共同体のアイデンティティをもち、自分自身の性質を生みだす者にたいして、その人と何も共有していない人、すなわち見知らぬ人に、自分自身を曝すように求める共同体である。

このもう一つ別の共同体は、たんに合理的共同体に吸収されているのではない。それは幾度となく姿を現わし、合理的共同体の分身として、あるいはその影として、合理的共同体を撹乱するのである。

このもう一つ別の共同体は、作品のなかにではなく、事業と企てを中断させることによって姿を現わす。それは、何かを共有するとか、共有物を生みだすことによってではなく、何ものも共有していない者――アステカ人、遊牧民、ゲリラ、敵――にたいして、人が自分自身を曝すことによって実現される。この共同体は、人が他者と直面し、一つの命令[命法]を認識するときに形づくられる。この命令は、他者である彼または彼女を排除している共通の言説や共同体にたいしてだけでなく、人が彼または彼女と共有している物、あるいは作りだそうとする共有物のすべてに異議を唱える。

人がみずからを命令に曝すのは、自分の合理的知性によってだけではない。私たちの合理的知性が働くときにはかならず、環境から包括的かつ規則的にデータを集めるために、私たちの感受性も働く。また、所作の領域[実践的領野]にある力、障害物、因果関係を、包括的かつ規則的に計測するために、私たちの運動能力も働く。そして、社会的な場で機能している命令と服従の関係を包括的かつ規則的に記録する、私たちの他者にたいする感受性も働く。人がみずからを他者に曝すのは、裸の目によってであり、物を摑むことを抑止され、何も持たずに他者へと向けられる両手によってであり、他者の声によってかき乱され、武装を解かれた自分自身の声の弱さによってなのである。

人は、自分の洞察と観念を、それらのものが異議を唱えられるように、他者――見知らぬ人、貧困者、審判者――に曝すだけではない。人はまた、自分の裸の目、自分の声、自分の沈黙、自分の何も持っていない両手をも曝しているのである。というのも、他者、すなわち見知らぬ人は、彼または彼女の確信や判断だけでなく、彼または彼女の弱さ、傷つきやすさ[可傷性]、死すべき運命をも、こちらに向けてくるからだ。彼または彼女は、その顔、偶像、そしてフェティッシュを、人に向けてくる。彼または彼女は、地に返る土でできた炭素化合物の顔を、土と空気、暖かさ、血、光と影でできた顔を、こちらに向ける。彼または彼女は、苦

次ページにつづく

しみと死すべき運命とによって傷つき皺がよった肉体を向けてくる。共同体は、人が自分自身を裸の人間、困窮した人間、見捨てられた人間、死にゆく人間に曝すときに、形づくられる。人は、自分自身と自分の力を主張することによってではなく、力の浪費、すなわち犠牲にみずからを曝すことによって、共同体に参入するのである。共同体は、人が自分自身を他者に、自分の外に存在する力と能力に、死と死すべき運命の他者に、曝けだす動きのなかで形づくられる。

出典 : アルフォンソ・リンギス著, 野谷啓二訳『何も共有していない者たちの共同体』, 洛北出版, 2006年, pp.11-13, 27-29.(ISBN:4-903127-02-8)
原著：Lingis, A. (1994). *The community of those who have nothing in common.* Bloomington: Indiana University Press.
権利者の許可を得て掲載。

問１） 著者の述べる「もう一つ別の共同体」とはどのような共同体であるかについて、文章から理解できる内容を 400 字以内で要約せよ。

問２） あなた自身が考える「もう一つ別の共同体」の具体的な像を提示しながら、もう一つ別の共同体を論じる今日的意義を 1000 字以内で自由に論述せよ。

Discussion Exam (English)

Sometime around their first birthday most infants begin to engage in relatively sustained bouts of attending together with their caretakers to objects in their environment. By the age of 18 months, on most accounts, they are engaging in full-blown episodes of joint attention. As developmental psychologists (usually) use the term, for such joint attention to be in play, it is not sufficient that the infant and the adult are in fact attending to the same object, nor that the one's attention cause the other's. The latter can and does happen much earlier, whenever the adult follows the baby's gaze and homes in on the same object as the baby is attending to; or, from the age of 6 months, when babies begin to follow the gaze of an adult. We have the relevant sense of joint attention in play only when the fact that both child and adult are attending to the same object is, to use Sperber and Wilson's (1986) phrase, 'mutually manifest'. Psychologists sometimes speak of such jointness as a case of attention being 'shared' by infant and adult, or of a 'meeting of minds' between infant and adult, all phrases intended to capture the idea that when joint attention occurs everything about the fact that both subjects are attending to the same object is out in the open, manifest to both participants.

The phenomenon of joint attention, under that description, was initially studied by developmental psychologists interested in the development of pre-verbal and early verbal communication during the second year of life—interested, that is, in the emergence of pointing and the transition from pointing to the accompaniment of such pointing with various pre-verbal 'comments' and finally, by the time children are 2 years old, to the production of basic sentences in the context of short conversations. And the importance of joint attention for the development of such early verbal communications is hard to overestimate. As Bruner (1977, p. 287) puts it, joint attention 'sets the deictic limits that govern joint reference, determines the need for referential taxonomy, establishes the need for signaling intent, and eventually provides a context for the development of explicit predication'. But commenting on this work retrospectively some thirty years later, Bruner (1995, p. 1) notes that there was a sense in which the phenomenon of joint attention itself was simply taken for granted. In particular, he says, '[e]pistemological questions [such as how infants and toddlers 'come to know about other minds or how they come to realize that other minds know theirs'] never entered the discussion'. Nor, he says, did the questions of the nature of the mental concepts that the babies and toddlers use when engaging in bouts of joint attention.

【出典】

© The several contributions 2005
Eilan, N. (2005). *Joint attention*. Oxford: Oxford University Press, pp.1-2.
Reproduced with permission of the Licensor through PLSclear.

Questions:

1) Explain what is the central characteristic of joint attention as opposed to the fact that two persons are attending to the same thing?
2) Explain why Burner in 1995 reflecting on what he wrote about joint attention in 1977 is unsatisfied with what he originally thought?

問題冊子は回収します

2019 年度
先端総合学術研究科（一貫制博士課程）

一般入学試験問題（2019 年 2 月 3 日実施）

小論文

入試方式	試験時間	解答方法
一般入学試験	11：40～12：40　（60 分）	問題を解答

（途中退室はできません）

【解答にあたっての注意】

1. 使用する言語の解答用紙に受験番号・氏名を記入すること。
   （使用しない言語の解答用紙には受験番号・氏名は記載する必要はない）

2. 試験中に気分が悪くなった場合は、静かに手を挙げて監督者に知らせること。

日本語の論述試験と英語の論述試験の＜いずれか１つ＞を選択し、文章を読んで設問に答えよ。
（日本語の問題を選んだ場合には、英語の問題には回答しないこと）。
Select either the Japanese or English examination, read the sentences and answer the questions.（If you choose the English examination, you don't need to answer the Japanese one.）

小論文（日本語）
以下の文章を読み、設問に答えよ。

「時が流れる」と、ひとは言う。
が、時とは、河の流れのように、かんたんに流れてくれるわけではない。
たとえば、ぺしゃんこになるまで踏みつけられた、あるいはごそっと肉をえぐりとられた、としか言いようのない過去の出来事。ちらっと思い出しただけで躯（からだ）ががたがた震えてしまう過去の傷。口では「過去の」と言っているが、それはほんとうは過去の出来事なのではない。それはいまでもふとわたしの表情をよぎるものであり、フラッシュバックというのだろうか、ちょっとしたきっかけでわたしをぐらぐら揺さぶる。その烈しさに衰えはない。過去が文字どおり過ぎ去ったものだとすると、それはいまもわたしのどこかで疼（うず）いている。そう、いつまでも過去になってくれない出来事、「いま」から滑り落ちていってくれない出来事である。
待つというのもよく似た時間の出来事である。
これ以上待ちつづけたら身が崩れる。ばらばらになってしまう。この一分すら耐えるのがむずかしい。時間が苦痛の持続そのものになっている。時間の地平は塞（ふさ）がりきって、あしたのことなんか考えることもできない。ましてや半年先のことなんて。また同じことのくりかえし。期待を抱けば、ちょうどそれと同じ、いやそれ以上の疲労が後にかならず襲ってくる。その疲労を受けとめるだけの余裕が、圧（お）しひしがれたわたしにはもうない……。そしてぼそっとつぶやく。「わたし、もうこれ以上待てないわ」。
これをこんどは、過去の傷についてすでに言ったように、いつまでも現在になってくれない未来、「いま」へと到来しない未来だと、言っていいだろうか。
未来があるというのは、希望があるということ、いや希望を容（い）れることができるということである。これにたいして、絶望とは、未来に何も託さない、いや託せないということである。そうはたしかに言える。
あるいは、もっと一般的に、未来を夢みたり、未来に目標をもつことができるということ、これが、過去に愉しい思い出や苦い悔恨をもつこと、過去のじぶんの行為に責任をとることとともに、ひとであることの証（あか）しである。未来や過去をもてるというのは、現在から離れるということであり、現在にあって不在のものを思うことができるということである。
さきに、いつまでも過去になってくれない疼きの「いま」にふれたが、疼きは原因となった出来事が過ぎ去ったにもかかわらず、いまも執拗にわたしに襲いかかる。その意味では、これもひとであることの証しである。これにたいして激しい苦痛は、ひとを「いま」に閉じ込める。激痛に見舞われているとき、わたしは激痛が消えたあとのことを思って、気を紛らす余裕がない。過ぎ去った昔の思い出に安らかに浸ることもできない。二、三分後、二、三分前のことすら考えることもできない。文字どおり、ひとは「いま」に貼りつけられる。

[中略]

言葉は、ひとを「いま」から引き剥がしてくれるものである。言葉によってひとは時間の地平を超える。「ママ」という言葉を覚えた子どもにとって、母は目の前にいてもいなくても「母」である。犬は目の前にいてもいなくても「犬」である。だから、その不在に泣きじゃくるばかりではない。泣き叫びながら、母を、犬を、捜しもする。ひとの「現実」は、このように不在のものとともに編まれている。目の前にあるもの（現前）から離れることができるということ、それが希望と追憶を可能にし、誇りと落胆をもたらす。
①**「いま」というのは、だから、ひとにおいては、デジタル時計の表示するような瞬間的な点ではない。**現在が刻々と過去へと滑り落ち、未来がつぎつぎと現在に流れ込んでくるというわけではないのである。

[中略]

「過去と未来を現在の以前以後で定義するのは見当違いではあるまいか」と語ったのは、大森荘蔵である。大森は、「過去なるものが想起という意識の外にそれと独立して実在するのではなくて、想起される命題の言語的意味の中に実在するのだ」と言う。これはどういうことか。「夢をみたがそのことを憶えていない」というのが、日本語の文章として意味をなさないことからもあきらかなように、「一旦まず夢をみる、そして後刻それを想い出す、というのではなく、夢を想い出すこと、それが夢をみた、ということなのである。私たちは『夢をみる』という現在形の体験を持つことはない、ただ、夢の想起という形で『夢をみた』という体験があるだけなのである」（『時間と自我』）。要するに、夢を想起するという体験が「夢をみた」という経験にほかならない。そこに

は、夢をみたという過去形の経験があるばかりなのである。そして、「夢をみた」と語ることは、夢から醒めている「いま」をかたどることでもある。風呂上りに、「ああ、いい湯だった」とつぶやく言語行為が、湯につかっていた過去とそこから上がっている「いま」とを区切り、こうして時間に先後の順序をつけることで「いま」が明確なかたどりを得る。

若い日、「哲学」を大森に学んだ中島義道が、これを承けて書く。「私はまず現在の知覚に対応して『暑い』という現在形を学び、次に過去の想起に対応して『暑かった』という過去形を学ぶのではない。言葉を了解することは『現前（an-wesend)』の刺激に反応することではない。むしろ、刺激が『不在（abwesend)』でも、それを意味として了解することなのである。現在暑い場合に『暑い』と語ることだけができる者は『暑い』という言葉を学んだことにはならない。『もう暑くない、まだ暑くない、暑かった』という暑さの不在を学ぶこと、それがすなわち『暑い』という言葉を学ぶことなのである」(『時間論』)、と。

こうした言葉による切り分けのなかで、＜時＞というものが成立してくる。「いま」が「いま」だけでなりたつものではないこと、不在との、切り分けというかたちでのかかわりなしには「いま」もまた消失してしまうことを、中島は「いま」についてのわたしたちの言葉遣いを例にとって、こう説明する。

「いま」と口にするとき、わたしたちは他の「いま」をそこから排除することを含めて、「いま」を「いま」ではないものから切り分ける。たとえば電話で「いま、何してる？」と訊くとき、「いま、きみと電話しているところだ」という身も蓋もない返事を期待しているわけではない。電話をかけた寸前まで何をしつつあったかという継続のなかで問いを立て、またそうした「いま」の切り取り方を共有するよう求めているのである。同じように、電話口で「助けてくれ」という友人の叫び声を聴いて、とっさに「いま行く」とわたしが応えるばあい、この「いま」は十分ほど先まで含んでいる。[中略]「いま」という言葉には、だれかに向けて同じ「いま」の幅を共有することへの呼びかけが含まれているというわけだ。

[中略]

過去と現在がこのように言葉によって「制作」されるとしたら、未来はどうだろう。未来もまた言語的に、とまでは言わなくても「意味」によって、「制作」されるのだろうか。未来がなりたつためには、未来が現在といっしょに切り分けられねばならない。が、それはどんな言語行為によってか。

「～してみたい」「～だったらいいなあ」といった願望表現によってだろうか。「きっと～してみせる」といった決意表明によってだろうか。はたまた、「～が起こりそう」「なんか怖い」といった兆しや予感によってだろうか。

過去を現在から切り分けることが過去の「制作」だというのがそうであるにしても、それでも「制作」である以上、それは何かのかたどりであるにはちがいない。「制作」以前に過去の出来事そのものがあるのではないにしても、それはもっと別なふうにかたどることもありえたことである。社会の歴史のみならず、ひとりの人生においても、過去は幾度となく語りなおされるもの、語り改められるものである。

未来はその点で、はじめから不確定である。何が起こるのかあらかじめわからないのが未来だからである。とすれば、先ほど挙げたような未来についての言明はどれも、予想とか予期とか予感でしかないと言える。「予」という字が示しているごとく、それらは未来の到来に先立って、あるいはそれに備えるかたちで、「あらかじめ」未来に投射されるものである。だからそれは、未来を語るかにみえて、じつは未来完了形で語っている。すでに視野にあるもの、あったものを未来に投影しているにすぎないのだ。すでに知っているもののうちでいまだ知らないものを測っているのである。このとき、「未来は既知の一様態」（フッサール）でしかない。

＜待つ＞ことにおいてはどうか。待ち望むというばあいには、おそらく実現してはいないがある意味ですでに知っているある事態を、たとえば再会や完成や終焉を、ゆるやかに待っているのであろう。待ち合わせる、待ち伏せるとか、待ち人来たらず、待ちぼうけをくわされるとかいうばあいにも、その登場を待っている相手はすでに知っているひとである。ひとはそのばあい、何かを待っているわけで、その何かはすでにあるかたどりを得ているものである。だからこのばあいの＜待つ＞は予期でしかない。それは待った後をあらかじめ思い描いている未来完了形の＜待つ＞である。

電車を待つ、返事を待つ、出産を待つ、春の訪れを待つ、刑期明けを待つ、そして酒の発酵を待つのと同じ、予期としての＜待つ＞である。そのときひとは、「いま」というところから、未来を完了態で先取りしようとしている。が、これは未来の経験の半面でしかない。あるのかないのかさえさだかでない、なんのはずみで起こるのかわからない、不意を襲ってふりかかる……といった思いがけなさの感覚が、未来の経験にはたしかにあるからだ。

②＜待つ＞にも同じように、何を待っているのか自身にもわからないような＜待つ＞があるのではないだろうか。そう、予期ではない待機としての＜待つ＞が。あるいはさらに、あらゆる予期がことごとく潰えたあと、諦めきったあとで、そこからようやく立ち上がってくる＜待つ＞が。

出典：鷲田清一『待つということ』, 角川学芸出版, 2006年, pp.20-28. (ISBN:978-4047033962)
権利者の許可を得て掲載。

問１）下線部①にあるような「デジタル時計の表示するような瞬間的な点」とは異なる＜いま＞とはどのようなものであると著者は述べているか。800 字以内で要約せよ。

問２）下線部②の「何を待っているのか自身にもわからないような＜待つ＞」「予期ではない待機としての＜待つ＞」とはどのようなものだと考えられるか。また現代において「予期ではない＜待つ＞」を論じる意義とは何か。1500 字以内で自由に論述せよ。

Discussion Exam (English)

この問題は、著作権の関係上、公開していません

この問題は、著作権の関係上、公開していません

------ Questions --------

1) What is according to the authors the main weakness of the study by Nunn 2008 which constitutes their own starting point?
2) Explain the meaning of the underlined sentence segment in the second paragraph.
3) Do you think that the authors' central thesis is convincing and why?